資料8

令和２年度　富山市通学区域審議会

第１回審議会における論点整理

Ⅰ.望ましい学校規模（学級数・学級人数）

～ポイント～
■学級数は多すぎても少なすぎても課題がある。また、質の高い教育を保障するため、1 学年 2 学級以上は確保していく必要がある。
■教員の面からみても、複数学級であることは、教材研究や授業の質を高める上でも意義がある。
■40 人学級にこだわらず、低学年と高学年で学級人数に差を設けるなど新たな学びを研究していくことがよいのではないか。

１．学級数について

○　まずはどうやって質の高い教育を担保するかを考えていくべきで、小学校の複式学級はなるべく早く解消してあげる必要がある。

○　子どもたちには、学習発表会などの場で、クラスの枠を取り払って、様々な人間関係の中で、協力して取り組む体験をさせてあげたい。
　また、教員の立場から考えると、学年が複数の学級で構成されていれば、教材研究や他の授業を見て、教員同士学びあうことができる。

○　中学校の場合、1 学年に 3～5 学級あれば 1 人の教科担任がその学年だけを見ることができるが、それより少ない場合は複数の学年を見ることとなり、負担が増える。適正な学級数があった方が、現場の教員はありがたい。
　小規模校では教科によって、専門の免許を持っていない先生が教えるという、免許外指導が発生することがある。

○　市町村合併により、平野部・中山間地域・豪雪地帯など様々な地域がある。全市一律の基準とするのはいかがなものか。市民アンケートでは、現在の学校配置が望ましいと回答した比率の高い地域もある。

○　再編を考える前に、今ある学級を分割して、複数学級にすることで学級の人数を減らし、先生のストレスを解消して、子どもたちによりよい授業を受けさせてあげることを考える必要があるのではないか。

２．学級人数について

○　学校によって、人生の選択肢が少なくなったり、閉ざされることがあったりしてはいけない。体力づくり、仲間づくり、部活動、生徒会、コンピューターを活用した学習などで、教育を受ける機会が奪われてはいけない。

○　今の子どもたちは、多様な人間関係の中では自己表現ができない、ストレスを感じるという子どもが多く、適正配置を行う上で、どのように目が行き届くような教育環境を保障するか考えていく必要がある。複数学級は必要だが、そのような目が行き届く範囲の学級人数であることが必要ではないか。

○　学年 1 学級のなかには、1 学級 10 人以下もあれば、40 人近くの学級もある。大規模校は少人数指導もできるが、小規模校は少人数指導しかできない。大規模校の課題は工夫することで解決することが可能なことも多いが、人数が少ない場合はなかなか解決できない。小規模校は解消したほうが良いと思う。

○　法令どおりではなく、新たな学びについて検討する中で発達年齢という考え方を取り入れ、小学校低学年と高学年とでは、多少、学級人数に差があってもよいのではないか。

○　40 人学級では、コロナ禍において 3 密対策で苦労していると聞く。30 人学級を前提とした再編もやむを得ないのではないか。

○　40 人学級にこだわらなくてもよいのではないか。学級人数を減らして学級数を増やし、これ以上学級数が増やせないときに初めて学校を統合することがよいのではないか。

Ⅱ．望ましい通学距離と通学時間

～ポイント～

■通学時間は小学校区では 30～40 分以内がひとつの目安ではないかと思う。また、中学校区は小学校区がまとまっているので、大体見えてくるのではないか。

■時間だけではなく、どの通学方法を選択するか考えていく必要がある。

■通学距離・時間を短縮するため、地域をまたいだ通学区域の見直しを行ってはどうか。

○　小学校においては、徒歩で通学できる範囲が望ましいと考える。地域の方に挨拶などを行うことで、地域の中で子どもを育てることができる。小学校高学年で 30 分かかる場合、低学年では 45 分くらいかかっていると思うが、これが 1 時間となると、やっぱり遠いと感じる。通学路の安全や不審者対策

を考慮すると、広域化するようであれば、スクールバスを検討していただきたい。

○　気象条件や地理的な条件があるため、一律に定めるのは難しいが、スクールバスであっても、30 分以内が苦痛なく通学できる時間なのではないか。

○　国の基準は特に小学生には厳しいと思う。30～40 分程度が限度ではないか。中学校は部活動が終わる時間に合わせてスクールバスを運行することが難しいため、できるだけ自転車で通える時間や距離がよいのではないか。

○　30 分以内とアンケートで回答している市民が 8 割いる。1 時間以内を提示するときはそれなりの説明が必要だと思うので、30～40 分の範囲で考えたほうがよいと思う。

○　20～30 分歩くということは子どもたちの体力づくりに役立っていると感じている。バス停まで歩くとか、学校の手前で降ろすということも必要ではないか。

○　保護者の肌感覚は 30 分以内である。一方、高学年になると、「体力がついていいよ」とプラスの方向に変わる。低学年だけにスクールバスを出すなど柔軟な対応があればよい。

○　通学に地域の関わりがあるかどうかで、通学時間が長く感じるか、安心安全に通学できるかが変わると思う。統廃合が進んだ時に、地域の知恵によって解決している地域もある。小・中学校は地域なくしては考えられないため、地域における学校の立ち位置をはっきりしてあげればよいのではないか。

○　地図上では近い学校があるのに、地域ブロックの関係で遠方の学校に通っているケースもある。これを機会に、統廃合を含めて、通学区域を見直すことも必要ではないか。

Ⅲ．その他のご意見

○　学校を有料で貸し出したりし、もっと利益を上げるような運用方法を考えてみてはどうか。

○　すべての子どもが、文部科学省が求める教育を受けられるよう、また、今後、予算がなくて学校備品等の修繕ができないようなことが起こらないよう、コスト面からも考えていく必要があるのではないか。

○　多様な人間関係が影響するのは高学年からであり、低学年ではまだ早いと思う。